

基礎研 レポート

まちづくりレポート | 多摩に広がる共感コミュニティ

社会研究部 准主任研究員 塩澤 誠一郎
(03)3512-1814 shiozawa@nli-research.co.jp



1—はじめに

まちづくりレポートは、過去4回、いずれも1つの自治体の取り組みを取り上げてきた。今回は、自治体ではなく、市民主体の5つの事例を取り上げたい。主に活動しているエリアも1つの市町村ではなく、東京の「多摩地域」である。

5つの事例に共通している点は、すべて、人々の共感によるゆるやかなつながりを活動のベースにしていることである。多摩地域では、ここ数年、そのような取り組みが目立って増加しており、ここでは仮に「共感コミュニティ」と名付けることにした。

共感コミュニティの成り立ちには、現代の地域社会に必要な要素が内包されており、様々な共感コミュニティが生まれることは、地域社会にとって有益だと考える。だからこそ、まちづくりレポートに取り上げた。

以降では、はじめに共感コミュニティの5事例それぞれについて、運営している方から伺った内容を基に、主な活動や運営方法について紹介する。そこから、5つの事例に共通する点を捉えて、共感コミュニティの特徴を浮かび上がらせる。

次に、運営している方の証言を基に、共感コミュニティが多摩地域において増えている理由を考察する。最後に、地域社会にとって共感コミュニティが増えていくことの有益性を指摘し、地域社会で共感コミュニティを育む視点を提示する。

地域社会に属する住民の観点から一読していただければ幸いである。

図表1 事例位置



(資料)筆者作成

2—多摩地域の共感コミュニティ

1 | 共感コミュニティの実例

①国立本店



JR中央線国立駅北口から徒歩5分足らずのところに「国立本店」(国立市中)はある。本とまちをテーマにしたコミュニティスペースである。約15㎡のコミュニティスペースは、週5日概ね午後1時から6時まで開店しており、基本的に誰でも入店することができる。

運営するのは、「ほんとまち編集室」という35人からなるグループで、メンバーが一人ずつ概ね月1回必ず店番をする。コミュニティスペースの使い方は店番に委ねられており、中には、ワークショップや教室などを開催するメンバーもいる。ただし、好き勝手なことをしていいわけではなく、店番として、入店した人とのコミュニケーションが求められている。

コミュニティスペースには「ほんの団地」と呼ばれる本棚があり、希望するメンバーは40室ある本棚の一つに入居することができる他、一部、メンバー以外にも貸し出している。「ほんの団地」は、本を通じたコミュニケーションの場として備えてあるもので、定期的にテーマを決めて、入居者各自が、入店した人に見てもらいたい本を選定して並べている。新たな本との出会いを提供し、手に取った本を通じて、入店した人同士の交流が生まれることを期待しているのである。

年間登録料1,000円で「貸本」もできる。登録すると本の形態をしたノートが渡される。「ほんの団地」から借りた本と同じ場所に、そのノートを置き、本を返すときにはノートに感想などを記入して店番に預ける。ノートは貸本を通じたコミュニケーション手段となっている。

このように「国立本店」は、誰でも利用できる場所だけでなく、本とまちをテーマに人々がつながる仕組みを複数用意しているのだ。

家賃や光熱費など、「国立本店」の運営に掛かる経費は、基本的にメンバーの参加費で賄われており、参加費は一人月4,000円(学生は3,000円)である。この運営スタイルにしたのは2012年からで、毎年メンバーを新規に募集しており、現在は4期目だ。第4期メンバーの募集には28人の新規応募があったという。つまり、月々数千円の参加費を支払ってまで、月1回店番を行おうとする人が30人近くもいるということである。しかも毎年同数程度の新規応募者がいるというのだ。

どのような人が応募するのだろうか、「ほんとまち編集室」代表の加藤健介(かとう けんすけ)さんに伺うと、基本的に本が好きだったり、まちに関心があったりする人だという。応募者の中から、国立本店の運営に興味を持ってくれ、積極的に活動できる人に参加してもらっているそうだ。

「ほんとまち編集室」の活動には、店番以外に、本の出版、フリーペーパーの発行などがある。メンバーは自分の興味・関心に応じて、これらの企画を提案し、企画に応じてメンバーから関心のある参加者を募る。

例えば、3ヶ月に1度発行する「国立本店フリーペーパー」は、毎号メンバーの話し合いでテーマを決めて、テーマに応じて編集長を選び、写真撮影者を決めて制作する。最新号のテーマは「肉」で、市内の肉を扱った飲食店や、肉に関係する本を紹介している。メンバーの中にライターや編集、デザイナーを仕事としている人がいることから本を制作できる環境が整っており、実際に出版した本やフ

リーペーパーの完成度は非常に高い。

このように「ほんとまち編集室」は、基本的に「本とまち」に少しでもかかわりがあることであれば、メンバーがしたいことを全面的に受け入れている。そして、様々な背景を持ったメンバーがかかわって企画を煮詰めていき、メンバーの専門的スキルでしっかりとアウトプットを作りだしている。

加藤さんは、このような編集室の状況を、「やりたいことがあったとき、やれる人がいればやる。動き始めたら、勝手に動き始める。メンバー個々の関わり方のレベル感はいろいろ」と説明してくれた。

つまり「ほんとまち編集室」には、メンバー個々の興味・関心を受け止め、実行するゆるやかな関係があるのだ。そのような関係の中から、最近では社会的に意義のある活動にも取り組み始めた。

2015年には、医師で文筆家であった高田義一郎がかつて居住した住宅が取り壊されることになったのをきっかけに、旧高田邸と高田義一郎の魅力を多くの人に伝えようと、「旧高田邸プロジェクト」に取り組んだ¹。

1929年築の旧高田邸は、85年前の国立大学町の様子を伝える佇まいと、その手の込んだモダンな意匠で、取り壊すのが惜しまれる程の建築物であった。また、高田義一郎は、豊富な著作で知られていたが、国立との関係はこれまであまり紹介されてこなかった。プロジェクトでは、3月16日から25日までの10日間、旧高田邸を会場にして、著書や写真資料の展示、建物詳細調査結果の報告などのイベントを開催した。イベント期間中の来場者が3千人を超え、社会的影響力のあるプロジェクトとなったという。8月には、クラウドファンディングで資金を集めて、旧高田邸の記録や高田義一郎の足跡をまとめた「旧高田邸と国立大学町85年の物語」という公式カタログ²を出版した。短期間で取りまとめたにもかかわらず、その内容は非常に充実している。加藤さんは、このプロジェクトを実施したことで、「周囲から地域のために何かできる人達だと認められた気がする」と話してくれた。

この活動は、市内に唯一残る銭湯の改修工事をきっかけに、ペンキ絵の塗り替え資金をクラウドファンディングで調達し、ペンキ絵師によるライブペインティングを実現しようという現在進行中のプロジェクトにもつながっている。個人的な興味・関心から、面白いと思って始めたことでも、多くの人々の共感を集め、社会的に意義があると認められる活動に発展する可能性があるということを証明しているのである。

加藤さんに、メンバーは何を求めて参加しているのかと質問したところ、加藤さん自身は、「日頃の仕事や生活とは別のベクトルで活動できて、普段の生活で接する人とは全く違う背景を持った人と関わりを持つのが面白い」と答えてくれた。おそらく他のメンバーも同じなのだろう。また、「普段は都心で働いているけど、そのスキルを地域で活かしたい。自分の仕事以外でここを使って面白いことをしたいと思っている人が参加していて、特にフリーで働いている人は、地域に何らかの関わりを持ちたい。地域とつながりたいという意味を持っている」と話してくれた。

国立本店は、地域に関心がある人、自分のスキルを生かして地域の人とつながろうとする人の受け皿となり、それによって、様々な背景を持つ人同士をつなげる場になっているのである。

¹ 実行委員会を組織して行い、加藤さんが実行委員長。国立市、国立市教育委員会などが後援している。

² 企画・編集：旧高田邸プロジェクト実行委員会。1冊1,200円（税込み）で販売している。



入り口



読書スペース（すべて筆者撮影 以降特に記載がない場合同じ）



店番カウンター（奥）



貸本に使用するノート状の代本



「旧高田邸と国立大学町 85 年の物語」(上)と「国立文庫」³ (下)



国立本店フリーペーパー



ほんの団地

³ 国立の店や人を取材し、伺った話からそれぞれの物語をつくり、物語の序章部分を目録のようにまとめた書籍。企画・編集：木村健世+国立文庫編集室（国立本店有志メンバー）。1冊 300円（税込み）で販売している。

②Chika-ba (ちかば)



「Chika-ba」(ちかば)は、JR南武線谷保駅北口から徒歩2分程の距離の建物地下に、2014年7月オープンした(国立市富士見台)。運営するのは、西川義信(にしかわ よしのぶ)さんと小野円(おの まどか)さんで、二人は異なる団体を主宰しており、約52㎡の工房スペースとキッチンをシェアしている。

西川さんは、「アトムガレージ」という、工房に備え付けた道具を使用して、ものづくりをしたい人が集うものづくりコミュニティを運営しており、小野さんは、「おへそキッチン」⁴という、ジャムやピクルスの製造、販売を主体とする個人事業を営んでいる。

「アトムガレージ」は、入会金1万円、月会費5,000円を支払うことで、誰でも利用することができる工房である。ただし、会員が工房を利用する際は、単なる利用者ではなく、その日の工房を取り仕切る「工房長」になることが決められている。

工房長は、ものづくりに関心がある人誰もが参加できるよう、SNSを通じて工房の開室を告知し、体験利用者に機械の操作方法を教えたり、ものづくりの相談に来た人の相談に応じたり、見学に訪れた人などの対応をすることになっている。

つまり、「アトムガレージ」にとって会員はお客さんではなく工房を運営する当事者であり、工房は、一人で黙々とものづくりを行う場ではないのだ。この点が、単に場所や道具を貸し出すものづくりの場とは異なる。したがって工房を利用しようと集まった会員は自ずと、人とのコミュニケーションやつながりを厭わない人達だという。

西川さんは、「Chika-ba」の工房を「ものことづくりの場」と表現している。ものをつくるスペースであり、そこから「もの」や「こと」が生まれる場だという。「ものを作るには学ぶことが必要で、学ぶのは一人では面白くない。誰かと補い合う方が面白いし、広がりが出る。そういう状況を見たかった。そして、それが今の地域社会に必要なと思った」という。

西川さんは、工房開設にあたり、レーザーカッター⁵を購入して工房に備えた。工房に備えた機器はレーザーカッターのみ。レーザーカッターを備えるには排煙処理をする必要があり、個人で家庭に導入するにはハードルが高いことが理由だ。他の機器や機材は会員が自ら備えたものであり、各自がここにあるといいと思うものを、自分で判断して持ち寄り、会員同士シェアして利用している。機材のメンテナンスも利用する会員が自分で行っているという。基本的に工房の運営は工房長を担う会員同士に任せるという工房長制度を導入することによって、工房長同士が補い合う関係、つまりコミュニティを築いているのである。

西川さんは、「コミュニティ自体が面白い。レーザーカッターという道具はサービスの入り口にすぎない。そこから広がるコミュニティ自体に価値がある」という。

現在、工房長をする会員は10名ほど。ボードゲームの製造、皮革製品の製作、絵本作家、看板・サインの製作など様々だ。自分で作りたいものを作る人も、人から注文を受けて作る人もいる。自分が作ったものを販売するマーケットで作品や製品を販売している会員もいる。

⁴ ジャムやピクルスの材料に市内で採れた素材を使用し、市内の畑を活用して味噌造りのワークショップを行うなど、国立という地域性を生かして、子育て中の母親達の仕事を創出する、コミュニティ・ビジネスと言える事業を展開している。

⁵ レーザー光で切断などの加工を行うデジタル工作機器

工房長という仕組みは同じだが、工房でものづくりをする目的や、そこで作られる「もの」は会員によって様々だ。様々な人が、ものづくりを一緒に楽しむという関係に惹かれて参加しているのだ。

レーザーカッターなどのデジタル工作機器は、パソコンを使えば誰でも使用でき、大量生産はできないが、ある程度の数の製品を完成度高く作ることができる。西川さんは、こうした環境を「新しい日曜大工」と話す。「ものをつくるのがみんなの手の中にあるようになってきた。これまでは、自分でできる環境がなかったが、今は、ここのような小さな場所でもできる。身近にこのような場所があれば楽しい」と話す。

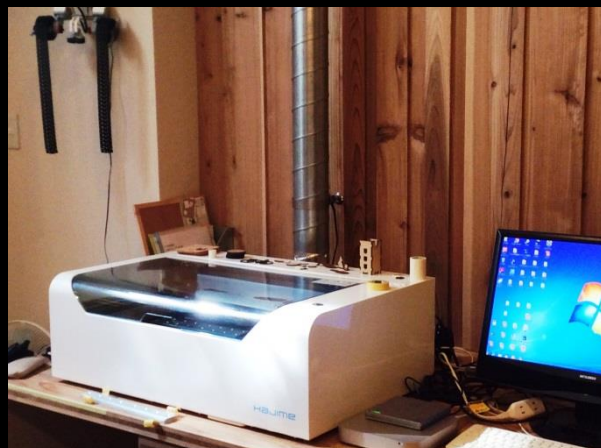
確かに、「Chika-ba」のようなものづくりコミュニティを育む場所が生活圏毎にあれば、住民の地域社会への関わり方が変わってくるのではないかと、共感コミュニティの持つ可能性を強く感じた。



工房 (Chika-ba 提供)



地下に降りるエントランス階段
(Chika-ba 提供)



レーザーカッター



キッチン

③西国図書室



J R 中央線西国分寺駅から徒歩9分のところに、「西国図書室」はある（国分寺市日吉町）。運営しているのは篠原靖弘（しのはら やすひろ）さん。夫婦で暮らす自宅の一室を日曜日だけの図書室として開放している。

建物はもともと洋服の仕立屋として利用されていたもので、今も入り口のガラス戸にはその時の店名がそのまま残されている。そこに小さく「西国図書室」と記された紙が貼ってある。開店している印だ。入り口を入るとたたきの間があり、その奥が図書室で、「こんにちは」と言って扉を開けると、「いらっしゃい」と篠原さんが笑顔で迎えてくれる。先に訪れていた方々も、小さく「こんにちは」と挨拶してくれた。図書室には居心地のいい、心地よい空気が流れている。図書室は、概ね毎週日曜日の午後1時から5時頃までオープンしており、多い日は、10人程がここを訪れる。

まず興味を引かれたのは、自宅を開いて図書室にしていることだ。その理由を篠原さんに伺った。篠原さん夫婦は、ここに暮らす以前はシェアハウスに暮らしており、ワンルームマンションのひとり暮らしにはない共同生活の楽しさ、豊かさを経験した。シェアハウスを出てからの住まい方として、誰かが気軽に家を訪れるような暮らし方が自分たちらしいと考え、ふさわしい賃貸物件を探していたという。そこで出会ったのがこの物件だった。店舗併用住宅なので、住みながら外に開く暮らし方に適していた。下見した際、自分達の本棚をここに置くイメージから図書室にするアイデアが膨らみ、契約して住み始める頃には図書室にしようと考えていたという。

自宅を図書室にしていることと共に興味深いのは、篠原さんが「本が旅する」と表現する、ユニークな貸し借りの方法だ。西国図書室では、利用者は、自分が図書室に預けた本と同じ数の本を借りることができる。つまり図書室には、篠原さん夫婦の本の他、ここを利用する人の本が置かれている。利用者は、図書室に自分の本を預ける際は、「本籍証」というカードにメッセージを記す。「本籍証」には、本の魅力、お薦めする理由など、預けた人のこの本への思いが綴られている。預ける期間、つまり本が旅する期間は1～3年の間で、預ける人が決められる。

本を借りるときは、本に添付してある「本籍証」に眼を通し、本を返却する際は、「旅の記録」というカードに感想などを記す。借りた人の数だけ「旅の記録」が積み重なっていく。「本籍証」に本への思いを記し、気になる本を手にとって「旅の記録」や「本籍証」から、本の内容や本の所有者、読者に思いを巡らすという、本の貸し借りを通じて、人とのつながりを意識することができる仕組みである。

年会費500円で会員登録し、1冊あたりの貸出料は100円⁶だが、貸出料は国分寺エリアで流通する地域通貨「ぶんじ」で支払うことができる。筆者は話を伺った際に会員登録した。会員番号は204番。図書室をオープンしたのが2012年2月で、それから4年近くの間200人を超える人が、本を旅させたことになる。

「本が旅する」仕組みは、夫婦だけで考えたのではなく、友人や国分寺で知り合った仲間と一緒に考えた。はじめはそうした仲間のつながりから知られていき、しだいにメディアで取り上げられる機会が増えると、それまで接点のなかった、初めて図書室を訪れる人も多くなったという。

⁶ 中学生以下は年会費、貸出料ともに無料

本の貸し借りの中で篠原さんとの会話が生まれ、訪れた人同士、本を通じたちょっとしたコミュニケーションが生じる。そうしたことがなくても、誰かが自分の本を読んでいるかもしれないと想像して、人とのつながりを意識する。自宅を開き、「本が旅する」仕組みによって、本の貸出だけを目的にした場所では成り立たない、ゆるやかなつながりを育む場所が成立している。

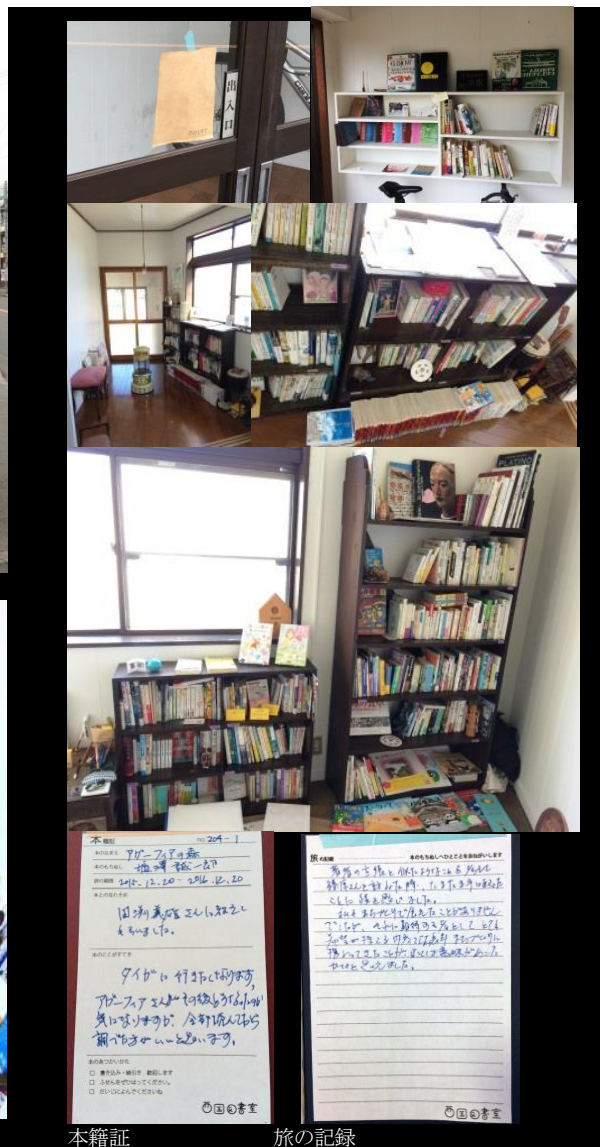
篠原さんは、「本を持ち寄って、本を通じて会話ができるのがいい。ここだから起こる会話がある。思いがけず面白い人と出会うことや、全然知らなかった話を聞くことができる」と、図書室として開いていることの楽しさを話してくれた。

また、「しばらく来なかった近所の方が、久しぶりに来てくれると、実はこうでという話しをしてくれたり、ずうっと来たいと思っていたけどなかなか来られず、3年ぶりに来たという人がいたり、誰かにとって必要な場所になってきている」と感じ、それがうれしいと話す。

篠原さん夫婦の私的な思いで始めたことが、それに共感する人のゆるやかなつながりを生み、誰かにとってなくてはならない場所になりつつある。自分たちにとって必要だから始めたことが、他の人のためになる。西国図書室はそうした関係を育む場所になっているのである。



図書室入り口



図書室内の様子

本籍証

旅の記録

④西調布一番街つくるまちプロジェクト



京王線西調布駅北口すぐに、西調布一番街商店街がある（調布市上石原）。駅前から旧甲州街道に続く延長 100m程の間に 30 数軒が軒を連ねている。近年、利用客が減り、テナントの空室率も高く、入居する人も高齢化していた中で、2014 年に「西調布一番街つくるまちプロジェクト」⁷が始動した。このプロジェクトは、商店街に多くのテナント物件を所有するオーナーが、商店街を再活性化し、自分たちが育った街を面白くしたいという思いで、株式会社ブルースタジオ⁸に相談を持ちかけたことをきっかけとして始まった。

西調布一番街は、夕刻から営業する飲食店が多く、日中開いている店が少ない。調布駅周辺の中心商業地に近く、商売は難しいが、かといってアパートにしてしまうと商店街が死んでしまう。賃料相場からすると建て替えるメリットも少なかった。オーナーとブルースタジオは、このような状況の西調布一番街を再活性化するためには、人々がここを訪れるための何らかの強い動機が必要だと考えて、何度もミーティングを繰り返し、最終的に、「まちぐるみのアトリエ」という構想に至った。調布からアクセスしやすい距離に美術大学やアート系専門学校がある。そうした地の利を生かして、比較的若いアーティストやアーティストの卵が、商店街に開かれたアトリエで日中活動し、相場より低い賃料でオーナーがその活動を応援する。アトリエの活動を通じて、昼間商店街を訪れる人を増やすという構想だ。

2棟のテナントに4室のアトリエを設け、家賃は相場の3分の1に設定、2014年10月から入居者の募集を開始した。応募要件は、何らかの作品を「つくる人」で、日中アトリエで活動できる人だ。活動する際はアトリエを開いておくことが原則で、商店街の人や、アトリエを訪れる人などと普通にコミュニケーションできる人、むしろ積極的にまちの人と関わりを持とうとするマインドを持った人を求めた。最終的に24組の応募があり、書類選考で10組に絞り、面接選考を経て5組を選定した。この5組が入居して、2015年2月、アトリエがオープンした。

このプロジェクトを担当し、それをきっかけに自らもアトリエの上階に暮らして、アトリエ入居者の管理的立場でプロジェクトを支えるのは、ブルースタジオの谷田恭平（たにだ きょうへい）さんだ。谷田さんは、「募集を始めるまで応募があるかドキドキしていたが、集まったらこんなにいるんだと思った。結構な発見だった。今となっては、もっとたくさんいると思う」と話してくれた。応募者数が予想を上回った理由は、応募者が、低い家賃に魅力を感じたことであろうが、何よりも、まちの人との関係の中で作品づくりをしていくことに共感を覚えたからではないだろうか。

入居した「つくる人」達は、作品の制作場所としてアトリエを用いているばかりではない。子ども向けのワークショップを行ったり、映画の上映会をしたり、作品の展示販売をしたり、造形教室を行ったりしている。この他、すべてのアトリエが参加する、「西調布一番街つくるまちプロジェクト」としてのイベント等も実施している。プロジェクトに共感した入居者が、それぞれが持つアートを生み出す力を生かして、思い思いの方法で、オーナーの思いに応えようとしているのだ。

こうした活動を通して、映画制作の打ち合わせ中に、フラッとアトリエに入ってくる人が現れたり、

⁷ 西調布一番街つくるまちプロジェクト <http://tsukurumachi.tumblr.com/>

⁸ 東京都中野区 一級建築士事務所 <http://www.bluestudio.jp/>

商店街のお年寄りがアトリエを訪れて入居者とおしゃべりをしていくようになった。自転車圏内から子ども連れでワークショップに参加するお母さん同士のつながりも生まれた。

谷田さんは、オープンから1年経過したまちの変化を「まちに違う表情が出た」と表現した。今までは、なじみ客が多く、なんとなく閉じた雰囲気があったそうだが、小さい子ども連れの若いお母さん達が商店街を通るようになって、少し風通しがよくなったと感じているという。

自前のイベントだけでなく、プロジェクトとして他地域のイベントに呼ばれることが増えたのも変化の一つだ。入居者ぐるみでイベントに参加することで、西調布一番街のプロモーションになり、商店街に人が来てくれる手応えを感じつつある。

商店街に思いがあるオーナーと、オーナーが取り組むプロジェクトに共感する入居者の取り組みがまた、それに共感する利用者を増やし、商店街に人が来る状況を作り出そうとしているのである。



西調布一番街



アトリエ「石倉方1号」入口 2組がシェア入居



アトリエ1号 (ukiuki labo)



アトリエ「板倉方2、3、4号」入り口



アトリエ2号 (町田七音)



板倉方内部



アトリエ3号 (eskimo)



アトリエ4号 (アトリエくじら)



⑤キョテン 107



「キョテン 107」は、JR 中央線日野駅に程近い店舗併用マンションの 1 階にある（日野市日野本町）。約 29 m²のコミュニティスペースは平日 5 日、概ね午前 10 時から午後 6 時までオープンしている。レンタルスペースとして貸し出しもしており、9:00～12:00、13:00～17:00、18:00～22:00 という枠を、1 枠 2,000 円、2 枠 3,000 円、3 枠 4,000 円という低価格で借りることができる。

スペースを運営するのは、「ひのプロ」といい、正式名称は、「日野宿通り周辺『賑わいのあるまちづくり』プロジェクト実行委員会」という。この名称からも分かるとおり、実は、日野市の事業から生まれた取組である。

2013 年に日野市は、空き店舗を活用して、日野宿通り周辺活性化のための拠点づくりを行う事業に取り組み始めた。拠点づくりに現在の場所を活用することになり、事業を推進する実行委員会を立ち上げ、市の補助金を用いて拠点づくりや賑わいを創出する事業などを実施することにした。

市の事業に取り組む公的な団体というと、堅苦しいイメージを抱くが、「ひのプロ」の運営に携わる中心メンバーは若い人が多く、そこに堅苦しきは無。市内で材木店を営む、実行委員会代表の宮崎寛康（みやざき ひろやす）さんが、これまでの商店街の取り組みには無い新しいアイデアを求めて声を掛け、それに賛同して集まった人が主なメンバーだ。それだけに、若い店舗経営者、市内にキャンパスを持つ実践女子大学の教職員や学生、フリーで働く人、会社員など、メンバーは実に多彩だ。事業を担当する市役所職員も加わっている。「キョテン 107」での活動が始まってから惹きつけられるように参加した人もいて、今では人数にすると 30 人近くになるという。

「キョテン 107」は、2014 年 11 月にプレオープンし、2015 年 4 月に正式オープンした。これまでに、「ひのプロ」として実施したり、開催に協力したりしたイベントがいくつかある。市内のパン屋に声をかけて開催した「パンフェス」、実践女子大学の学生と日野駅周辺の飲食店のコラボレーションメニューを提供した「七夕ビアガーデン」、日野産の野菜を使った限定メニューを味わえるはしご酒イベント「ひのうバル」などだ。

この内容を見ると、商店街の賑わいづくりを目的にした取り組みであることが理解できる。だが、一見、賑わいづくりとは関係ないように思えるイベントも実施している。例えば、毎月開催している「プロジェクターの日」というイベントがある。「キョテン 107」にあるプロジェクターの使い道を考えるワークショップから始まったこのイベントは、毎月テーマを決めて、ゲストスピーカーを招き、プロジェクターも使いながら参加者と交流する機会になっている。

これまでに実施したテーマは、スケートボード、ショートムービー、ゾンビ映画、茶道、プロレス、文房具などと、これだけみるととても趣味的でマニアックであるが、その内容に興味を持って参加した人と新たなつながりができ、そこから新たな活動が生まれるという効果が現れているという。

コミュニティスペースには、プロフィールボックスという四角い箱を棚状に重ねた場所があり、こちらが一箱月額 500 円で貸し出している。実践女子大学生生活環境学科の高田典夫（たかた のりお）教授が設計し、市内の木工業者が製作し設置した。設置して貸し出しを始めただけでなく、「プロフィール

ルBOXを楽しむ日」というイベントを不定期で開催し、読書会、偏愛マップ⁹づくり、親子参加の読み聞かせ、駅ヨコ広場を使った古本市といったイベントを実施している。これらのイベントは、参加者同士交流しながら、コミュニケーションツールとしてのプロフィールボックスの楽しみ方を追求する格好の機会となっている。

「キョテン 107」の管理人をしている野村智子（のむら ともこ）さんは、プロフィールボックスについて次のように話してくれた。「ひとり一箱を借りて、それぞれ好きなものを置いたりして、自由に使ってもらいたい。当初は入居条件などを設けていたが、オープンして一年経ち、ここが面白いような場所だと認識してくれる人が増え、特段の制約を設けなくても、共感した人が面白く使ってくれるようになってきた」

こうしたイベントなどは、関わるメンバーがそれぞれにやりたいことを提案し、その運営も、それぞれができる範囲で、力を出し合って進めているという。イベントに興味を持つ人が参加し、参加した人が、また新たな企画を提案する。その状況を野村さんは、「入れ替わり立ち替わり誰かが提案したり、実行してみたりということの積み重ね」と表現する。

宮崎さんは、その積み重ねの中から、「だんだんコミュニティができてきた。楽しい雰囲気が生まれ、さらにいろんな人が来るようになった」と、この間の成長を振り返る。

「キョテン 107」の隣で飲食店を営む、高田慶太（たかだ けいた）さんは、「個性的な方が集まって、いろいろなことを学べる場で、人のつながりができた。そこからいろんな事が発生する」と話す。

市内でアンティークショップを営む高畑勝（たかはた まさる）さんは、「だんだん面白い人が増えてくると、そういう人に会うだけでも参加するメリットを感じられる」と話し、実践女子大学食生活科学科の木川眞美（きがわ まみ）准教授は、「自分の世界が広がる感覚がある」と言う。さらに木川さんは、「この場所が人と人を繋ぐ機能を果たしてきている」と評価する。宮崎さんも、「つながりのキョテン」と表現した。

このように「キョテン 107」は、メンバーに限らず、面白い企画を提案すれば、それを一緒に考えて、行動に移すことができる関係が生まれる場となっている。そして、実施したテーマに共感した人がつながり、小さなコミュニティが生まれ、それが発する楽しげな雰囲気に共感する人がさらにつながって新たな共感コミュニティを再生産する。「キョテン 107」はそのような場所なのだ。

以前は、創業支援スペースとして貸し出すことを考えていた時期もあったというが、野村さんは、「創業したい人を応援する場というよりも、やりたいことがある人が使える場のほうが日常的に面白いことが起きそうだし、面白い人たちにも会えそうだと思った」と運営に関わる自分のスタンスを率直に話してくれた。

他のメンバーもここへの関わり方は様々であり、また思い思いの方法で利用している。例えば、高畑さんは、レンタルスペースを自らレンタルして商品の展示販売と展示テーマに合わせたイベントを定期的に開催している。木川さんも、大学を離れたこの場所で、市民向けの食育に関連するワークショップを毎月開催している。高田教授の研究室に所属する修士課程の吉武千晶（よしたけ ちあき）

⁹ 紙に自分が好きなものを書き出したもの。初対面同士が偏愛マップを交換すると、それだけで話が盛り上がるコミュニケーションツールとして有効だとされている。

さんは、店番もしながら、「キョテン107」のロゴやイベントチラシなど、デザインワーク全般を手がけ、大学生活だけでは出会うことのない人とかかわる貴重な機会を得た。

高田教授は、このようなメンバーのかかわり方について、「みんな考えていることはバラバラ。同じ方向は向いていない。ただし大きなところでは共有しているものがある」と分析し、野村さんも、「みんな違うことを考えているけど、一緒におもしろがる人はたくさんいる。それぞれ違うことが分かっているから、一緒におもしろがれる」と話す。

メンバーが「キョテン107」に関わる目的はそれぞれで、取り組む方法も様々でありながら、そこから生まれる人とのつながりや新たな発見、それらを楽しむ雰囲気といったことすべてが、「キョテン107」を通して、まちの賑わいづくりへとつながっていく。メンバーが根本のところでは共有しているものとは、そのことではないだろうか。



キョテン107に続くマンション通路



キョテン107の入り口*



キョテン107内部の様子



プロフィールボックス



イベント時の様子(キョテン107提供*は同じ)



*



実践女子大の学生が描いたシャッター*



*



*

2 | 共感コミュニティの特徴

以上5つの事例に共通する特徴は、いずれも、個人的な興味・関心事に基づく自発的な活動であり、外に開かれた、共感する者同士のゆるやかなつながりが形成されており、参加者が楽しげで、前向きであることだ。

中には、商店街の活性化という地域課題の解決を目的とした事例も含まれている。しかし、そこで実際に行われている個々の活動は、メンバーの興味や関心事に基づいた自発的なものであり、義務感や使命感から行っている活動ではない。

その活動は、いずれも人とのつながりを希求しており、つながり自体は閉じたものではなく外に開いたオープンなものである。運営するメンバーの関係はフラットで、そこで行う活動への関わり方、楽しみ方は人それぞれという、ゆるやかなつながりである。ミッションがあり、規約があつて、メンバーの役割が決まっていという組織的なものではない。

興味・関心事に基づく自発的な活動に、背景が異なる者同士で取り組むことで、一人では得られない発見や新たな展開が生じ、広がりが生まれる。だから活動が楽しく、前向きに取り組むことができるのだ。

3 | 共感コミュニティを成立させる3つの要素

5つの事例はいずれも、「共感の種」、「開かれた場所」、「つながる仕組み」という3つの要素を持っている。「共感の種」は、人々がつながるきっかけを提示するものである。「開かれた場所」は、文字どおり誰でも入ることができる場所だ。「つながる仕組み」は、人と人のゆるやかなつながりを生む仕掛けである。

例えば、「国立本店」であれば、本とまちが共感の種と言える。「国立本店」は誰でも利用できる外に開かれた場であることから、本とまちに引っかかりを持った人が集ってくる。そこには店番がいて、「ほんの団地」や「貸本」という、つながる仕組みを利用することで、ゆるやかなつながりが生まれる。そうした経験からさらに、「国立本店」の取り組みに興味を持ち、「ほんともち編集室」のメンバーに応募する人が出てくるのである。

5つの事例からは、共感コミュニティを成立させるためには、この3つの要素が必要不可欠であることがわかる。

図表 2 各事例における共感コミュニティを成立させる3つの要素

	共感の種	開かれた場所	つながる仕組み
国立本店	本とまち	国立本店読書スペース	店番（ほんともち編集室） ほんの団地、貸本
Chika-ba	ものづくり	工房	工房長制度
西国図書室	本、自宅を開いた図書室	図書室	「本が旅する」貸し借りの仕組み
西調布一番街つくるまちプロジェクト	まちぐるみアトリエ	アトリエ	入居者によるワークショップ等 プロジェクトによるイベント
キョテン 107	面白いことができる場	コミュニティスペース	店番、プロフィールボックス イベント

(資料)筆者の分析に基づき筆者作成

3—共感コミュニティが増えている理由

ここでは、これら事例の運営者や参加者の証言から、共感コミュニティが増えている理由、背景を考察したい。

1 | リアルなつながりが生む価値に重きを置く人の増加

そもそもこれだけ人とつながろうとする人が増えているのはなぜか。「国立本店」の加藤さんは、「インターネットによって様々な情報を得ることができるようになり、選択肢が広がりすぎた分、必要な情報を選択することが面倒になった」ということを指摘する。また、「テレビなどのマスメディアから与えられる情報に、これまでほど多くの人々が共感することがなくなり、むしろリアルなつながりの方が面白いと思うようになっている。ここに来ればある程度、人と共有できるものがある」と話してくれた。

メディアを通して与えられる情報より、直接的、間接的な人とのつながりから得られる情報や体験に価値を見出す人が増えているということだろう。「国立本店」に限らず、これらの事例の「開かれた場所」に集う人すべてに当てはまるのではないか。

リアルなつながりが生む価値に重きを置く人が増えたことが、利用者の側面から見た、共感コミュニティが増えていることの背景だとすると、共感コミュニティを運営する人たちの背景には何があるのだろうか。

2 | 暮らしのそばで楽しみ、働くことを志向する人の増加

加藤さんは、多摩地域には「自分が暮らす地域で仕事以外に何かしたい、ここに住んで、ここで何かしたいと考える人が多い」と思うと話してくれた。

「Chika-ba」の西川さんは、「仕事以外に自分のやりたいことをしたい人が増えているのではないかと加藤さんと同様の見方をする。また、「多摩地域は都心で働く人が住んでいる場所だが、最近、フリーで仕事をし始める人が増えてきて、そういう人はプロジェクト単位でつながる働き方をしている」と、多摩地域の人の働き方が変わってきたと指摘する。

加藤さんも、「多摩地域には、フリーランスの人が集まっているので、何かしらやろうとするとできる人がたくさんいる」と言う。

「西国図書室」の篠原さんは、住み開き¹⁰をしようとする人から相談を受けることがあると言い、そのような人は、「今は都心で働いているけど、将来地域で何かしたいと思っている人で、それが前提にある」と教えてくれた。さらに、「多摩の人は都心に行かなくなった。多摩地域の中で楽しめる場所があり、そこで働こうとする人が増えている。自分のまちで楽しもうとしている」と話す。

「キョテン 107」の宮崎さんは、「多摩には都心部と違う楽しみ方がある。人々が近くでどう楽しめるかを考え始めた。新しい遊び方、楽しみ方を見つけ出そうとしていて、そこに共感があるから動き

¹⁰ 自宅などの私的な空間を限定的に開放し、公的な場として活用する取り組み。活用方法は公益性のあることに限らず、自分の興味・関心事に共感する人と分かちあおうとする行為を、無理せず身の丈にあった方法で実現しようとしているところに特徴がある。アサダワタル著「住み開き 家から始めるコミュニティ」（筑摩書房）に詳しい。

が出て、価値観も合うので横のつながりもできてきている」という。

これらの証言から、多摩地域に共感コミュニティが増えている背景には、自分が暮らす地域に関心がある人の増加があることが分かる。自分が暮らす地域で人との関係を育み、楽しみを見出そうとしている人が増えているのだ。そのような人が、共感の種を入り口につながり、ここで示した事例のような各々の楽しみ方を現実の形にしている。

さらに興味深いのは、仕事も地域で見出そうとしている点だ。地域に接点を持ち、自分のスキルを生かして、可能であれば地域で仕事をしたいと考えている人が増えていると考えられる。

事業で成功を収めて都心3区にオフィスを構え、六本木や銀座といったメジャーエリアで遊ぶといった発想や、多摩の郊外に住み、平日は都心で働き、休日は家で身体を休めるかレジャーで郊外地に行くというライフスタイルとは違った生き方を追求しようとしている人が増えているといえる。

3 | つながりが、つながりを連鎖させる

「キョテン107」の高畑さんは、「キョテン107で会った人が、ここで面白いことをしているとSNSで語っていることを見るのが多くなった。ここを離れたところで伝わっている」と話す。

また、「地域資源をアレンジしてSNSで発信する人が増え、そこから広がって、別のところで新たなコミュニティが立ち上がる状況になっている」と話す。高畑さん自身も、他の取り組みを見て、「キョテン107」でもやりたいと思うことがたくさんあるという。

自分が暮らす地域に着目する人が増え、さらに地域の資源を編集して見せる人が登場している。そこで地域の魅力を再発見する人が増えており、面白いことをしているところに参加して、楽しさに気付いた人が、別のところで面白いことを始める。このように連鎖していく状況が現在の多摩地域にある。

さらに、連鎖的につくられた共感コミュニティ同士が、またつながっていく。「キョテン107」で「Chika-ba」が参加する交流会が開かれ、「キョテン107」のプロフィールボックスを「Chika-ba」が借りている。面白いことをしている場同士がつながって、そこからまた面白い状況が生まれている。

以上のように、多摩地域では、リアルなつながりが生む価値に重きを置く人が増え、暮らしのそばで楽しみ、働く志向のある人が共感コミュニティをつくり、その楽しさを知った人が拡散し、連鎖的に新たな共感コミュニティをつくっていくという、共感コミュニティ拡大の連鎖が形成されているのである。

4——共感コミュニティを育む意義

1 | 共感コミュニティが地域社会によい効果を与える理由

共感コミュニティが増えていくことは、地域社会によい効果をもたらすと筆者は考えている。理由は次のとおりである。

①共感コミュニティの分かち合う関係が暮らし心地よい地域社会を形成する

共感コミュニティの参加者は、人とのつながりに価値を見出している人たちである。そして外に開

かれた活動によって、同様の人を引き付ける力を持っている。

共感を基につながることは、ゆるやかな相互依存関係をつくることだと考えられる。例えば、本を共感の種にしたコミュニティは、本好きな人が、本について語り会いたいと考えたときに、同じ欲求を持つ人同士を引き合わせる。そこには、本について語り会いたいという欲求に対し、自分が知っている本の話をお互いに提供するという関係が成り立つ。お互いの欲求に対し、お互いでサービスを提供し合う関係だ。

相互依存関係という、常にそれに縛られる面倒な関係を連想しがちだが、この場合、自分の好きなことが人のためにもなる、人のためにすることが自分のためにもなるという相互依存関係である。簡単に言えば、分かち合う関係だ。これがなくても普通に生活できるが、あれば心地よいし、楽しいというものである。

共感コミュニティが増えることは、分かち合いの関係を生みだし、暮らしていて心地よい地域社会をもたらすと言えよう。

②共感コミュニティのつづやきを受け止め合う関係が地域課題を受け止めやすい地域社会を形成する

共感コミュニティには、誰かのつづやきを受け止め合う関係がある。こんなことができたらいいなという一人のつづやきを周りの人が受け止め、どうしたらいいかと一緒に語り合い、プロジェクト化して実行する。

こんなことができたらいいな、こんなことは個人的な興味・関心事で、やれば面白いと思うことが主だ。決して、行政が期待するような課題解決型の活動ではない。しかし、課題解決型の活動についても、日頃から、個人的な興味・関心事から発せられるつづやきを受け止め合う関係がなければ始まることは難しい。なぜなら、課題解決型の活動が始まるためには、地域課題を住民同士で共有することが必要であり、地域課題を共有するためには、共有しやすい関係がないと難しいからだ。

例えば、「身近で孤独死があったらいやだわ・・・」というつづやきを、周りの誰かが「そうよね、うちの近所にもひとり暮らしのおばあちゃんがいるわ」と受け止める。「どうにかならない？」といったやり取りが生まれるところから、住民同士の課題の共有につながる。このような、自分が感じていることを、一緒に考えてくれる人が周りにいること、誰かのつづやきをみんなの言葉にする関係があれば、地域の課題も共有しやすいと考えられる。

こうしたつづやきを受け止め合う関係は、実は今、地域社会に最も求められていることではないか。地域社会に何のつながりを持とうとしない人達や、逆に何かと干渉し合う濃密な人間関係よりも、誰かのつづやきを受け止め合うゆるやかなつながりがあることが、地域社会を運営していく上で重要ではないであろうか。それを備えた共感コミュニティが地域社会に増えることは、地域課題を共有しやすい環境を形成することにつながるのである。

③共感コミュニティが持つ地域への眼差しが地域の価値を高めることに貢献する

共感コミュニティの参加者は、自分が暮らす地域に関心がある人が多い。地域の魅力を掘り下げる視点、それを形にするスキルを持った人が、地域に眼を向け、地域の素材を抽出し、それを編集することで地域の魅力を普段と違った角度から浮かび上がらせている。地域の素材を使って楽しみ、それ

を受け止める人とも楽しみを共有し、地域への共感の輪を広げようとしているのである。

共感コミュニティが増えることは、このような共感コミュニティが持つ地域への眼差しによって、地域の素材を活用し、地域の価値を高めることに大きく貢献するだろう。

2 | 地域社会で共感コミュニティを育むことへの期待

①住民への期待

筆者は、地域社会が、より一層共感コミュニティに眼を向けるとともに、共感によるつながりが生まれやすい状況を意識的に用意すべきではないかと考えている。

例えば共感コミュニティの成立に欠かせない要素である、共感の種を蒔くこと、開かれた場所を用意すること、つながる仕組みを工夫することである。

共感の種を蒔くことによって、思いもよらない人とのつながりが生まれ、既存の空間を使い勝手の良い場所にすることで、ゆるやかなつながりを育むことができ、何らかのつながる仕組みを仕掛けることで、つながりが広がっていくことが期待できるだろう。

こうした、共感コミュニティを育む地ならしとも言える取り組みを、是非とも地域社会に属する住民に期待したい。

②行政への期待

共感コミュニティのようなゆるやかなつながりの形成は、これまで行政施策の対象として考えられてこなかったと思われるが、地域社会により効果をもたらす共感コミュニティを育むために、行政が取り組むべき事も多々あると考えられる。

実際に、「キョテン 107」と日野市の関係や、「ひのプロ」のメンバーである日野市職員の関わり方は、「キョテン107」の運営に大きく貢献しているのである。

また、5つの事例がいずれも公共施設ではなく民間の賃貸物件を活用している理由は、公共施設の使い勝手の悪さにあると思われる。

このような、共感コミュニティを育むための行政の関わり方や、公共施設をより活用しやすくすること等について、可及的速やかに検討していくべきであろう。

5—おわりに

筆者は、これまで課題解決型のまちづくり活動に、関係者としてあるいは専門家として関わる中で、その限界感や閉塞感を感じるが多かった。しかし、共感コミュニティにはそうした状況を変えていく可能性を感じている。

今回、話しを伺った方々から教えていただいた別の興味深い事例も含めて、ここで取り上げた事例の他にも、研究対象としたい事例が数多くあった。そうした事例を取り上げつつ今後さらに共感コミュニティに関する研究を深めて、共感コミュニティを育む具体方策まで掘り下げていきたいと考えている。

最後になったが、あらためて、本調査研究にご協力くださった皆様に感謝申し上げたい。